

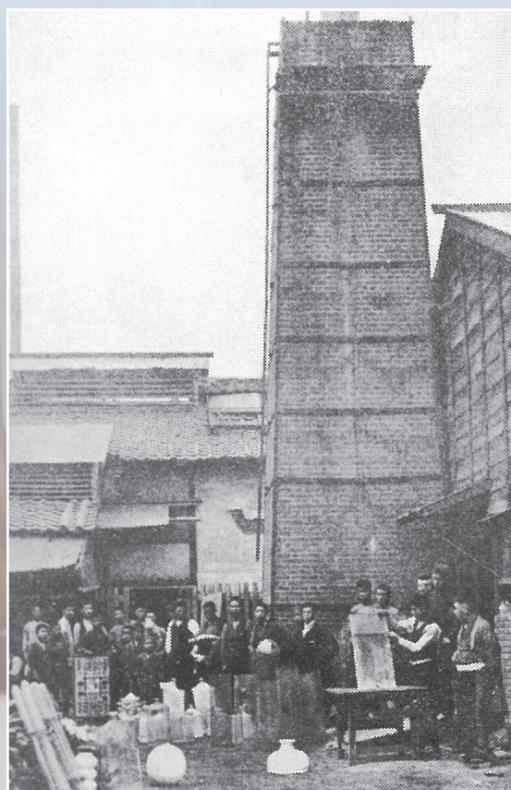


「岩城硝子製造所」の創業者岩城滝次郎の生涯

岩城滝次郎は安政4年(1857)千葉で生まれました。生家はイモ飴の製造と県下一円に駄菓子を売る問屋でした。

家業の手伝いをしていた滝次郎はある時、ガラス細工のかんざしを見て強く心を惹かれ、明治8年(1875)18歳の春に江戸本所の縁故をたよって、当時の一流のガラス職人であった沢定次郎の元に弟子入りしました。当時の工場では、ビン造りとランプのホヤ造りに主力を注いでいましたが、滝次郎はわずか2年あまりでジャッパン吹きと言われる共竿(ガラス竿)を用いての技術をマスターしたと伝えられています。その後、官営品川硝子製作所へ移った滝次郎は、25歳の若さで職工長を務めた後独立し、明治16年(1883)10月、東京市京橋区新栄町に「岩城硝子製造所」を創立しました。

工場では、西洋の技術と日本の技術の利点を折衷して、船燈用の色ガラスや、紅青色の精巧なガラス製品を作り、その素晴らしい作品で内外の人たちを驚かせました。また、ガラスの下駄、すずり、ステッキ、屋根瓦、装身具類などにまでガラスの美を追求し、その技術は明治20年(1887)の東京工芸博覧会出品のガラス装身具類が二等賞銀牌、同33年第3回勸業博覧会での切子紅色花盛皿の二等賞入選などによっても垣間見ることが出来ます。



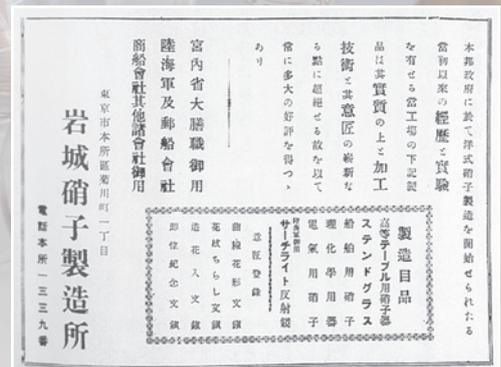
岩城硝子工場(東京市本所区菊川町)
出展:日本理化学硝子機器工業会史



名工岩城滝次郎(岩城硝子の創始者)

明治32年(1899)にはガラス製法の研究を目的として渡米、帰国後ステンドグラスの製造と販売を始めました。当時の岩城硝子のステンドグラスは国内の官庁、会社、教会堂、学校で使われた他、近隣諸国へも輸出され、その名が知られる様になりました。また、後の理化学用ガラスの分野で先駆的役割を果たす多くの職人達も輩出していくことになるのです。

滝次郎は1m80cm、70kgの大柄でお酒も強く、ガラスの虫とも鬼とも言われていたそうですが、大正4年(1915)脳溢血で倒れ、享年57で亡くなるまでガラス製造の発展に人生を捧げ、その功績は今でも大きく評価されています。



岩城硝子製造所(本所区菊川町1丁目)の広告(大正2年頃)
出展:日本理化学硝子躍動百五十年史